

秋季大会シンポジウム司会の記

品 田 悦 一

上代文学会二〇〇八年度秋季大会シンポジウムは、十一月一日（土）午後二時より五時半まで、慶應義塾大学三田校舎西校舎五二八教室において、予定どおり催された。予報では雨模様とのことだったが、当日はさわやかな秋晴れとなり、会場には、開始の時点で約九〇名、最大時には約一一〇名が集まった。盛況とまでは言えないものの、まずまずの集まりであった。

当日のテーマは「歌人論再考——大伴家持を中心に」というもので、鉄野昌弘・内藤明・鈴木健一（会員外）の三氏がパネリストを務められ、司会は私が担当した。前もって配布された案内にテーマの趣旨が書かれているので、ここに再掲しておく。

古典和歌研究を強力に支えてきた歌人論の枠組みは、新たな研究視角や研究手法が種々導入された現在、か

つてほど明快なものではありえなくなっている。表現の類型や出典といった問題に留意するとき、個々の作品を作者の自己表現の所産と見なすことに対し、研究者は相当慎重にならざるをえない。とはいえ、この枠組みが廃棄されたのでないことは、歌人の名を書名に含む論著が続々公刊されていることから明らかだろう。

四年前のシンポジウム「歌人論の行方」では、こうした問題意識から、額田王という、歌人論的アプローチの限界が指摘されている人物を取り上げたのだった。今回は、さまざまの個性が開花したとされる奈良時代から特に大伴家持を取り上げて、議論をいっそう深める機会としたい。

パネリスト選定の経緯を記すと、まず鉄野氏は、労作『大

伴家持「歌日誌」論考」（二〇〇七年、塙書房）の著者であり、四年前に「歌人論の行方」が企画立案された際を中心に人物でもある。内藤氏は、本年度のシンポジウム係の一人で、しかも上代文学研究者と現代歌人という、二つの顔の持ち主である。鈴木氏は、専攻は近世文学だが、平安時代の古典が後代にどう受容されたかという問題にも関心をもち、きわめて幅広い研究を続けている——三氏とも右のテーマを語らせるのに適任であって、それぞれの特色が相俟って討議が立体的になることが期待されたのであった。

例年どおり、前半は各パネリストが順に講演し、休憩時間を利用して質問用紙を回収、後半は会場からの質問をも活かしながら三氏が討論した。三氏の講演の内容は本号所載の論文に盛り込まれているはずだから、ここで一々紹介するまでもないのだが、行きがかり上、一、二、三気づいたことを記しておこう。

鉄野氏によれば、家持は人麻呂を画期的存在とする和歌史観をもつ一方で、自身のスタイルの直接の源流を山上憶良に求めていたのだという。そしてそこには、個々の詩人の独自のスタイルが総和としての文芸史を形成するとの、中国詩論が受容されているともいう。この話から私が連想したのは、突拍子もないようだが、かつて一世を風靡した保田与重郎の家持論であった（『万葉集の精神その成立と大伴

家持』一九四二年、筑摩書房）。家持に人麻呂の悲劇の後継者を見た保田の主張とは対照的に、鉄野説によれば、家持は自身を人麻呂の後継者とは考えていなかったことになる。このばあい気になるのは、家持が「幼年未逕山柿之門」と述べていた点である。「未逕」という句が、本来なら「逕る」べき場所には「まだ逕らない」ことを意味するとすれば、「山柿之門」は家持にとつて、「和歌の伝統を作った遠い範型」という、時間的に遠いものであると同時に、振り仰ぐほかないような高みをも意味していたのではないか。すると、和歌史というパースペクティブに自己の営みを位置づけていたという家持の意識は、氏が説かれるのよりもさらに苦渋に満ちたものだったようにも思えてくる。

家持の春愁三首が窪田空穂によつて発見されたとの橋本達雄氏の指摘は、すでに定説化したと言つてよいだろう。内藤氏の指摘するところでは、空穂が一九〇七―〇九年に「文章世界」に連載した「万葉新釈」には、当該三首は取り上げられておらず、「気分」というキーワードも使用されていないという。近代短歌に自然主義の影響が及び、歌壇の世代交代が進むなかで、空穂という、歌の作り手であると同時に読み手でもあった人の評価軸が変容し、歌は自己を表現するものであるとの了解のもと、当該三首はまさに家持という作者が自己の気分を表現したものと見て見出

されたのであった。いっそう興味深いのは、空穂を含む同時代の歌人たちの歌集に、ちょうどこのころから作歌年月順の配列が採用されていった、との指摘だ。歌人たちは、部類という伝統的配列を放棄する一方、歌集から自己の生の軌跡を読み取ることを読者に求めていったことになるが、そういう配列に従った歌集は、前近代にはほとんど例がないばかりか、近代でも明治三十年代までは皆無だったのである。家持の「歌日誌」はこの脈絡においても改めて注目されてよい。さらなる掘り下げが期待される次第だが、その際、「歌日誌」には他者の作もかなり含まれるという点を考慮に入れる必要があるだろう。

鈴木氏は、近世の出版物に見られる多様な家持像を、作者像の享受と表現の享受という二つの面から取り上げ、前者には事実即しつづ探求していく方向と、虚構化に進む方向とが見られ、後者には作品に内包される家持像を探る方向と、作者像を無化してしまう方向とが見られる、と整理した。実際に流布する歌人像は多種多様であって、それら相互の関係は排他的であるよりはむしろ相互補完的である、との主張かと見受けられた。近世文学に疎い私にとつては、式亭三馬や近松門左衛門までが家持に言及する文を残していたとは初耳だったが、建部綾足の『西山物語』が同時代としては例外的に春愁三首を引用している事実は、

前々から気になっていたところでもあり、綾足が家持に対して抱いていたらしい特殊な意識が何に由来するのか、改めて知りたいと思った。

三氏のうち、鉄野氏は歌人論の継承発展を目ざす立場、内藤氏と鈴木氏は歌人論を相対化する立場と言えるだろうが、後半の討論では鉄野氏に質問が集中したためもあって、三氏がそれぞれの立場から火花を散らすような場面は見られなかった。これは司会の責任が大きいことを白状しておく。有益な質問を寄せられた方々としては、小野寺静子氏、金井清一氏、新沢典子氏、鈴木宏子氏、西一夫氏らがおられた(五十音順)。当日の質問票が手許に残っていないため、今お名前を記した方々以外については記憶が鮮明でない。この点、失礼をお詫びする。また、それらの質問の内容と、各パネリストの応答をも復元すべきところだが、手許には断片的なメモしか残っておらず、正確な復元はとうてい果たせない。この点もお詫びする。そして、この文がかくも短くなってしまうことをもお詫びして、除夜の鐘が聞こえだす前に二〇〇八年最後の仕事を切り上げさせていただきます。

(十二月三十一日記)